

「世界の平均気温からの警鐘」(協同組合通信/山椒弾) 平成18年2月28日

先日、新聞各紙で報道されたとおり、昨年の世界の平均気温は平年に比べ、0.32も高かった。ある国の都市や地域の限定的な月別の値ではなく、世界全体の都市の年間平均気温が上昇した話。

統計値は1981年から取り始め、2005年の世界の365日の平均気温が、2番目に高かったことが、気象庁の調査で判明。ちなみに、我国の平均気温は平年(1981年~2000年)より、0.18高かった。

空気と同じように、人には気温は目に見えないが、体感温度で大よそ知れる。今冬の史上まれに見る日本海側地方を中心とした積雪とその及ぼす経済的影響や人災は、周知のとおり。気温の上昇は、このような異常気象がもっと頻繁に、さらには社会生活や農業活動及び農作物の生産と価格に及ぼす影響が大きくなることを暗示している。

気温の拳が大気にボディブローを浴びせ続け、もはや地球と言うリング内で取り返しのつかないボクシングが展開されつつある。平均気温の数値で判定し、猛烈な地球環境悪化の悲鳴のゴングをたたき始めている。

日本で世界で、気温の上昇が続いており、地球温暖化防止に歯止めがかからない状況といえる。誠にもって、ゆゆしきことである。

気温の上昇は、いくつかの要因やその複合作用でもたらされる。主因はCO₂などによる温室効果ガスが大気を覆う幕を形成したことにある。もって、太陽光の地面からの放射熱が、かつてのように大気圏に抜ける冷却効果がなく、再び反射され地上に戻り熱を加える悪循環で、地球温暖化がもたらされている。

京都議定書で、世界規模で石油の消費増がもたらす温室効果ガス削減への取り組みが行われているが、効果は現われていないことが改めて浮き彫りになった。批准国間の取組みが進むことも大切だが、何よりも世界の石油の大半をガブガブ浪費している某国の動向に左右される。すぐさまエコ型エネルギー経済システムに方向転換することを強く望む。

耐震設計やライブドア問題の国会討論は大事だが、地球温暖化防止に対する、各党の綱領や実行力のある政策を切望する。

(気象情報システム株式会社 高津 敏)